

# 宇多・行方郡の鉄生産と近江

専門学芸員 菅原祥夫

## 1 はじめに

律令期の陸奥南部は、城柵支配が及んだ仙台平野以北とは一線を画す地域である。このうち、現在の福島県新地町・相馬市・鹿島町・南相馬市にまたがる太平洋沿岸は、宇多・行方郡<sup>(註1)</sup>に属し、全国最大級の鉄生産コンビナートが存在した(図2)。その導入期の技術系譜は、遠く近江の官営製鉄所に求められている。

昨年、筆者は、8世紀中葉の鉄生産に関与した宇多郡官人の火葬墓に、近江の製鉄集団の墓制の影響を指摘し(図1)、遠隔地間の多面的に及んだ交流の一端を明らかにした(菅原2010 a)<sup>(註2)</sup>。またその後、関連遺物を館内に展示する機会を設け、多くの県民に高い関心を持ってご覧いただいている。そこで今回は、技術導入の際の工人の動きに焦点を当て、相互関係の実態をさらに浮き彫りにしたいと思う。さらに、併せて派生する問題にも触れたい。

## 2 宇多・行方郡の鉄生産の概要

宇多・行方郡は、古墳時代の浮田国造域にあたり、いわば兄弟関係にある。北側の宇多郡は、その名の示す通りかつての国造本拠地と推定され、郡衙周辺寺院(図2-5)の南1.2kmには国造推定墓(同図12)が確認される(鈴木・橋本2002)。それに対して、南側の行方郡は、古墳時代の突出した有力墓がみられず、郡衙(同図11)周辺領域の北側にも、連続的な豪族系

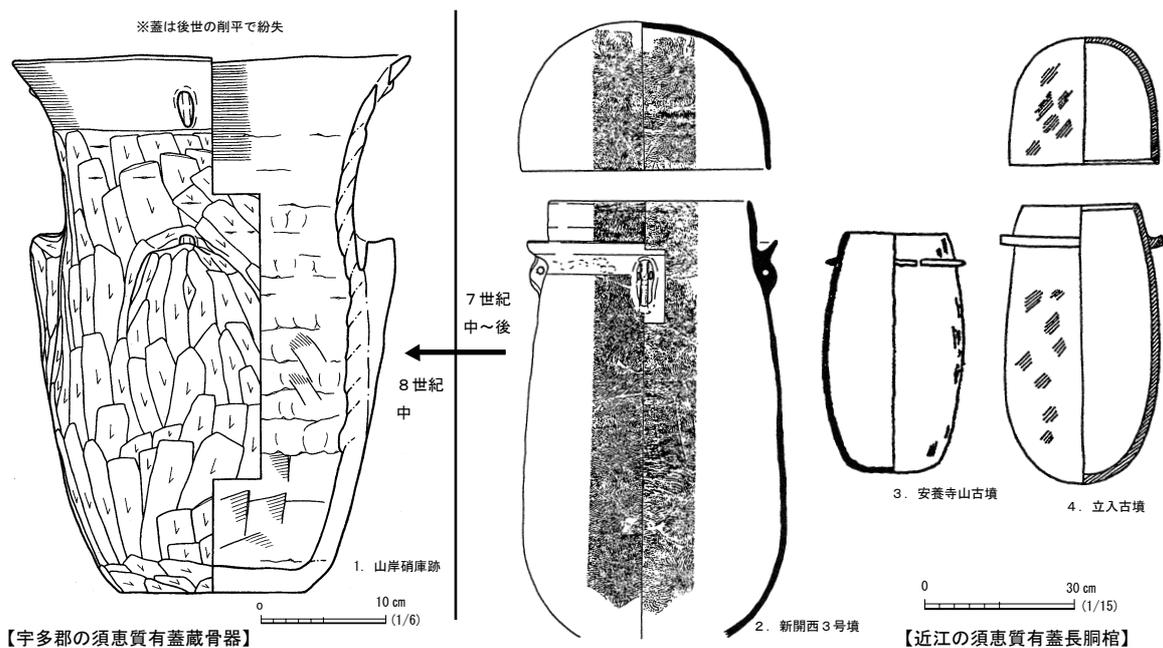
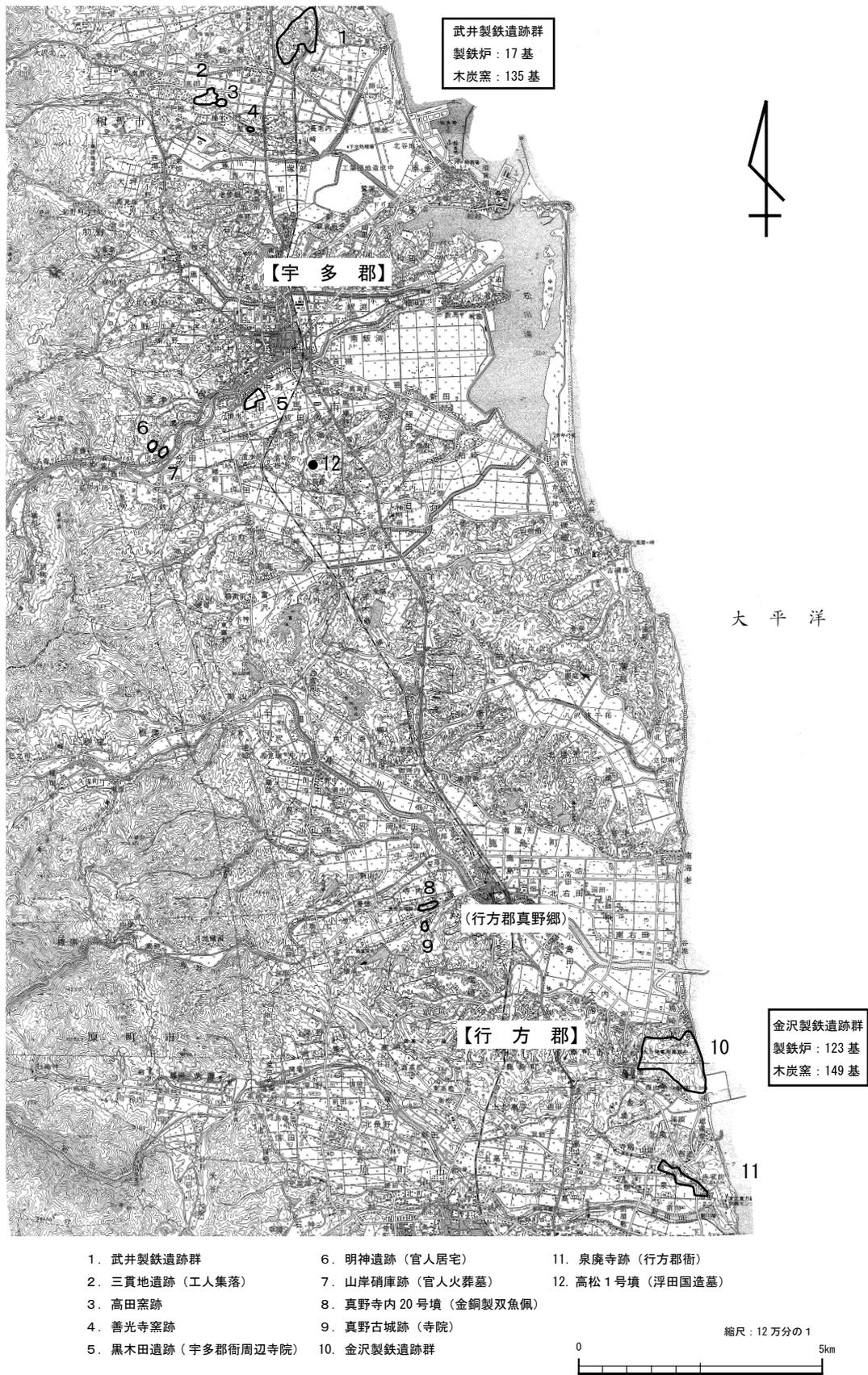


図1 火葬墓蔵骨器と須恵質有蓋長胴棺



- |                     |                      |                   |
|---------------------|----------------------|-------------------|
| 1. 武井製鉄遺跡群          | 6. 明神遺跡 (官人居宅)       | 11. 泉廃寺跡 (行方郡街)   |
| 2. 三貫地遺跡 (工人集落)     | 7. 山岸硝庫跡 (官人火葬墓)     | 12. 高松1号墳 (浮田国造墓) |
| 3. 高田窯跡             | 8. 真野寺内20号墳 (金銅製双鱼佩) |                   |
| 4. 善光寺窯跡            | 9. 真野古城跡 (寺院)        |                   |
| 5. 黒木田遺跡 (宇多郡街周辺寺院) | 10. 金沢製鉄遺跡群          |                   |

図2 宇多・行方郡の遺跡分布

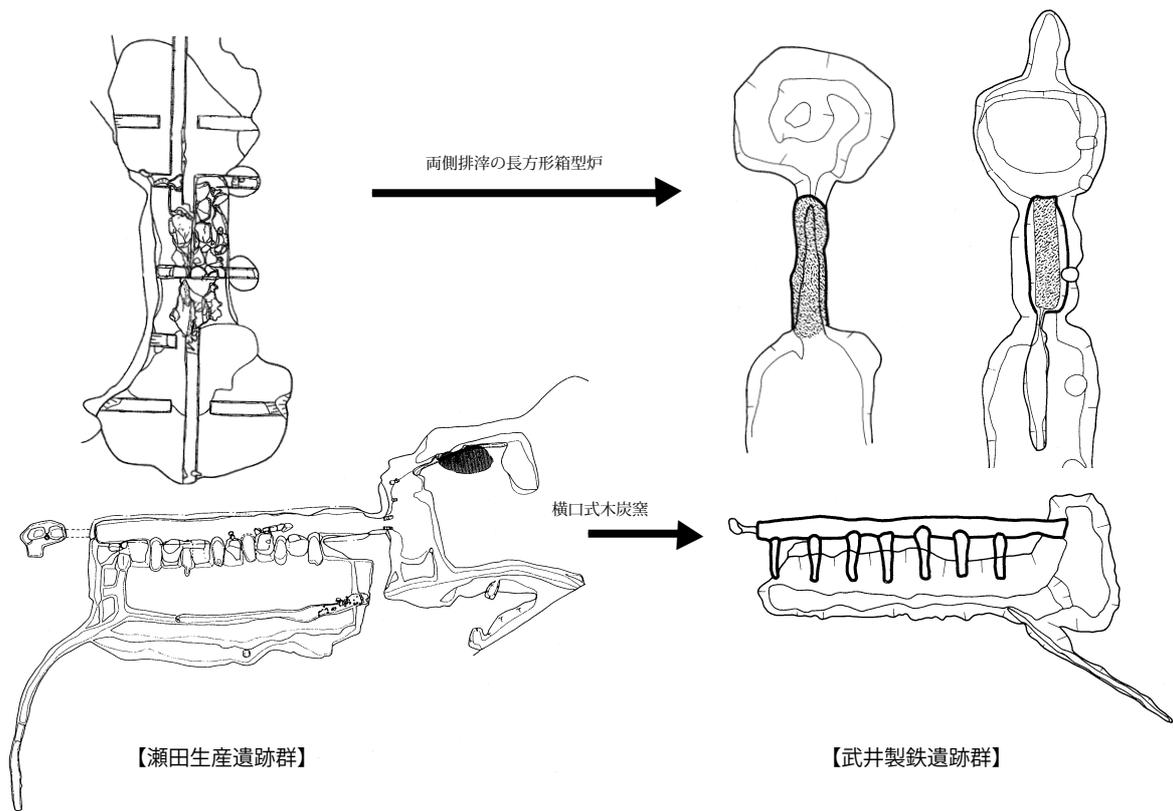


図3 製鉄技術の伝播

譜⇨真野郷が並立した（同図8・9）<sup>（註3）</sup>。したがって、浮田国造域から派生した両郡は、山中敏史氏の分類（山中1994）に当てはめると、本拠地型の宇多郡、非本拠地型の行方郡に区別することができる（藤木2009c）。

こうした背景を持つ宇多・行方郡の鉄生産は、7世紀後半に海岸線付近で開始され、その後、8世紀後半から徐々に範囲を阿武隈山地寄りへ拡散しながら、10世紀前半まで継続展開していった。その目的は、対蝦夷政策に関わる後方支援の一環とされ、生産量のピークは、いわゆる三十八年戦争（774年～811年）と重なっている（（財）福島県文化センター 1989・1995、安田2005、飯村2005）。

今回のテーマと関わる導入期の製鉄遺跡は、宇多郡の武井製鉄遺跡群と行方郡の金沢製鉄遺跡群が知られており（図2-1・10）、両側排滓の長方形箱型炉+横口式木炭窯のセット（図3・4）、また、製鉄と窯業生産が一体で行われる点に、特色が認められる（武井製鉄遺跡群-善光寺窯跡群（図2-3・4）、金沢製鉄遺跡群-鳥打沢A遺跡（同図10内）。これは、近江において官営製鉄所として整備された技術体系と同一である。

ところが、この技術体系が具体的にどのような工人の動きで伝えられたのかは、必ずしも明確になっていない。そこで、研究の進んでいる須恵器生産では、どのような類型設定がなされているのかを、次にみてみたい。

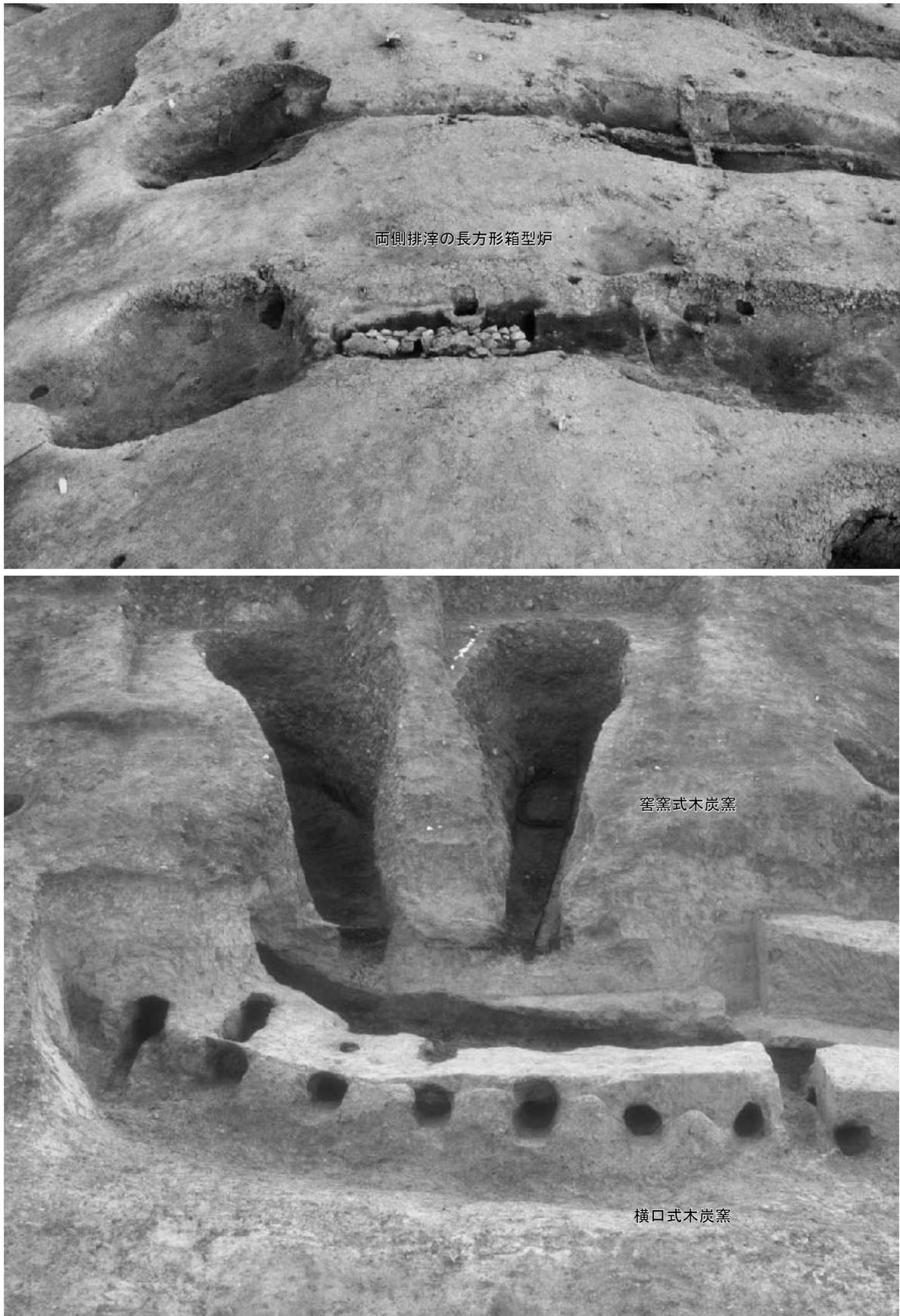


図4 武井製鉄遺跡群の製鉄炉・木炭窯

### 3 須恵器生産の工人移動パターン

菱田哲郎氏は、以下のような分類を行っている（菱田 1992・1996・2007・2010）。

#### 【大分類】

- 「中心-周辺」型 中心から周辺に、直接技術が伝えられる。
- 「玉突き」型 いくつもの地点を経由し、玉突き状に技術が伝えられる。
- 「模倣」型 技術は伝えられず、見かけだけが模倣される。→「様（ためし）」の配布

#### 【小分類】

さらに、大別類型のうち「中心-周辺」型には、次の細分を加えている（図5）。

- A：巡回型 中心の工人が周辺に赴いて直接生産にあたり、終了とともに帰るか、別な場所に移動するパターン→「巡回工人」。
- B：指導型 中心の工人が周辺に赴き、在地の労働力を組織して生産するパターン。
- C：帰郷型 労働力の提供あるいは技術の習得を目的に、周辺の工人が中心に赴き、一定程度生産に従事した後に、Uターンして生産するパターン→上番労働。
- D：帰郷指導型 帰郷型の工人が、さらに在地で技術伝習を行って生産するパターン

菱田氏は、こうした類型設定を示したうえで、帰郷・帰郷指導型主体（5世紀後半～6世紀前半）→「玉突き」型主体+巡回型客体（7世紀）の変遷観を与え、後者の背景に国家の関与を認めている。

また、この菱田説を調査例の豊富な東国の須恵器生産で援用したのが、高橋照彦氏である（高橋 1997）。同氏は、「古墳時代には、地方から畿内への上番という形（帰郷・帰郷指導型）が一般的に存在し、それが技術伝播の契機になった」のに対し、「律令期になると、基本的に伝達者が東国に来て教習活動（「玉突き」型、巡回・指導型）を行った」として、工人の動きが逆向きに変化したことを

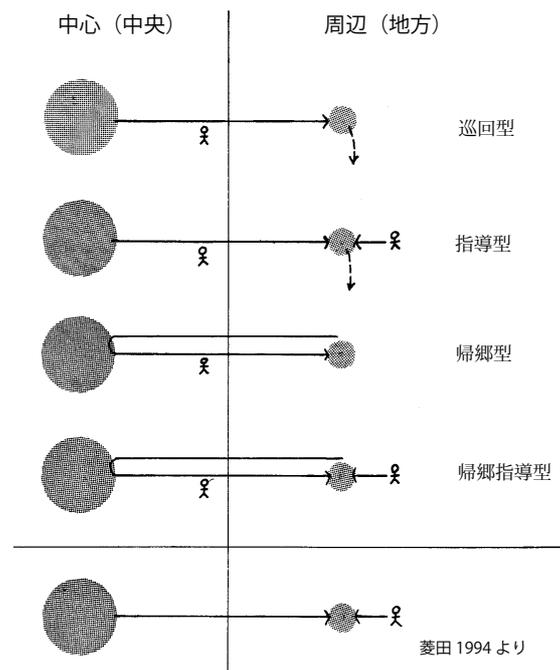


図5 工人の移動パターンモデル

明快に述べた。こうした捉え方は、現在、大局としては多くの共通理解になっているように思われる（註4）。

ただ、両氏自身が認めているように、工人の動きを実際に証明するのは難しく、律令期に顕在化したという、巡回・指導型の認定は、直接的な中心-周辺間のつながりが捉えられても、工人の動いた方向の証明は困難ではなかろうか。つまり、著名な鳩山I期の事例のように、中心工人の持参した外来系土器が周辺工人集落で発見されでもない限り（渡辺 2006）、帰郷・帰郷指導型の可能性が残るはずである。

#### 4 これまでの見解

須恵器生産の類型区分に当てはめると、現在、武井・金沢製鉄遺跡群に想定されているのは、概ね「玉突き」型に該当すると思われる。

飯村均氏は、その理由を、「両側排滓の長方形箱型炉+横口式木炭窯のセットは、愛知県の狩山戸・西山遺跡や神奈川県の上郷深田遺跡、茨城県の粟田かなくそ遺跡など、太平洋側各地に認められる」ことから、「近江において官営製鉄所として整備された技術が、短期間のうちに尾張・相模・常陸など（東国各地の）太平洋側を經由して、移入された」と説明している（飯村 2005）。これは、7世紀の須恵器生産に起きた排煙調整溝付窯の拡散状況と類似しており、菱田氏が「玉突き」型を設定した主要な根拠に対応するものである（註5）。また、安田稔氏も同様の見解に立ち、さらに言及して、直接の技術導入先を地理的に近い関東に想定している（安田 2005）。

この見通しの背景には、次のような陸奥南部の考古学的所見があり、実は、筆者自身も同じように考えていた。

【事例1】中通り地方中心に、関東系土師器を保有する7世紀前半の集落跡が、確認され始めている（菅原 2004・2007 a）。関東系土師器の系譜は、坏のきめ細かい胎土と器面漆仕上げの特徴から、千葉県印旛沼周辺～栃木県東部に求められる。

【事例2】7世紀後半から、武井製鉄遺跡群と一体的生産の行われた善光寺窯跡群では、操業開始期の7世紀前半の製品に関東の影響が認められる（（財）福島県文化センター 1988）。小型製品のお厚い、稚拙なつくりが共通し、茨城県幡山窯跡や埼玉県根平窯跡他、多数の類例をあげることができる。

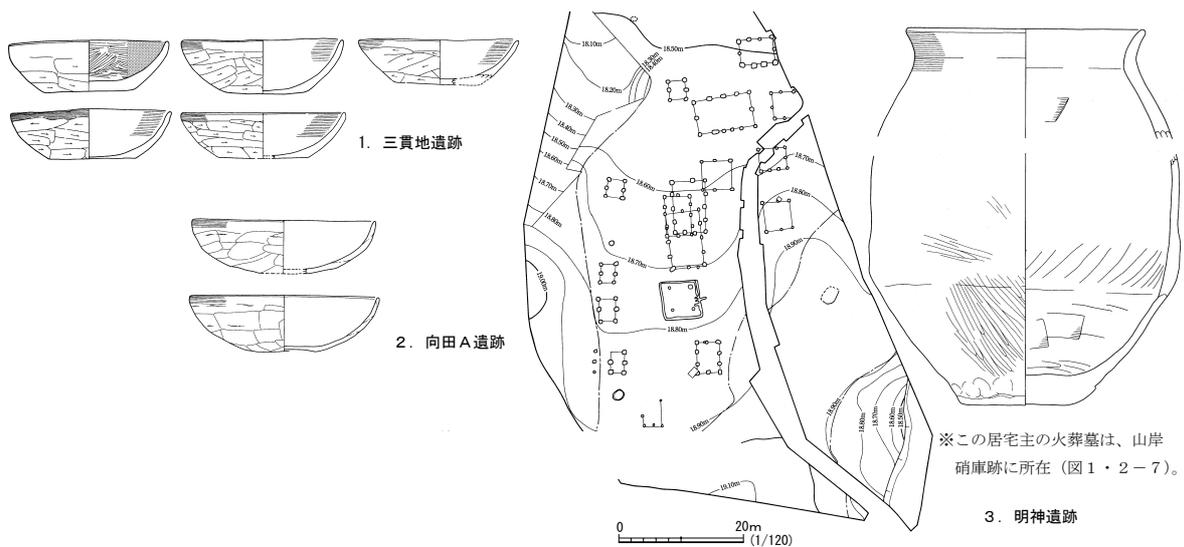


図6 関東系土師器

【事例3】郡衙・郡衙周辺寺院では、創建瓦に広義の山田寺・川原寺系瓦が多く使用されるが、それらは7世紀末～8世紀初頭に関東を經由して、伝播した。例えば、川原寺式系瓦の直接の祖型は下野薬師寺にあり、まず白河郡衙・郡衙周辺寺院と安積郡衙・郡衙周辺寺院に伝播し、さらに周辺へ広まるという経過をたどったことが捉えられている（福島県立博物館 1988、木本 1996、日本考古学協会 2010）。

【事例4】武井・金沢製鉄遺跡群では、7世紀末～8世紀前半の製鉄炉に関東の影響が認められ、8世紀中葉の工房跡などから、関東土師器坏・甕（図6-2）が出土している（（財）福島県文化センター 1989）。

【事例5】善光寺窯跡群とその工人集落跡（図2-2）では、8世紀前半の関東系土師器坏（図6-1）が出土しており、宇多郡の鉄生産に関与した官人の居宅跡（図2-6）では、8世紀中葉の関東系甕（常総型、同図6-3）が出土している（（財）福島県文化センター 1987、（財）福島県文化振興事業団 2006）。

また地名考証によると、行方郡は常陸国行方郡と同一名であり、両地域間には多数の同一字名があることも重要である（鈴木 2009）。→「小鶴・島田・馬場・宮田・井田・根本・海老沢・鹿島・太田・太田和・大谷・大野・小高・大甕・泉・牛渡・村上・大井・岡田・石上・五台・真野・信太・小池」

ところが、この見方に修正を迫る資料が現れた。

## 5 近江出土の東北系土器

2010年12月11・12日の両日に、古代官衙・集落研究会による第14回研究集会「官衙・集落と鉄」が開催された。その際、滋賀県栗東市教育委員会の雨森智美氏が持参した土師器坏を実見する機会に恵まれ、小論のテーマにとって重要な資料であることを認識した。

以下に、その観察結果を記す。

### (1) 3点の土師器坏

実見した土師器坏は、3点ある（註6）。内訳は、1点が高野遺跡と岩畑遺跡の境（資料1）、2点が下鉤東遺跡から出土したものである（資料2・3）。いずれも、内面ヘラミガキ+黒色

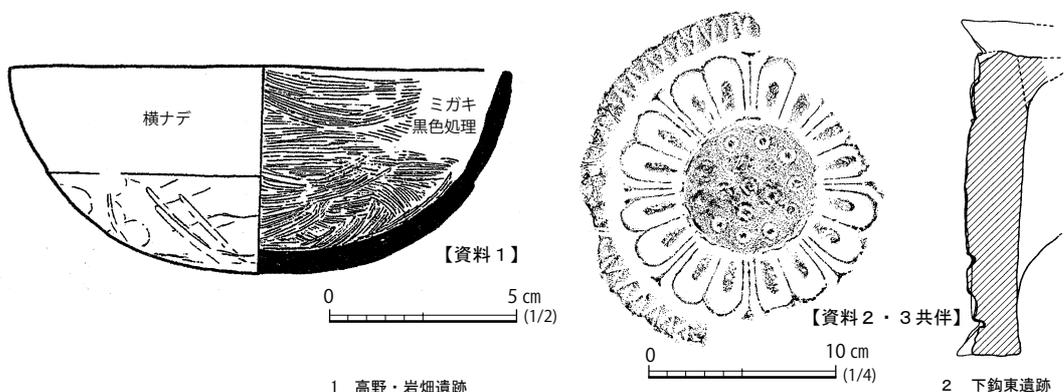
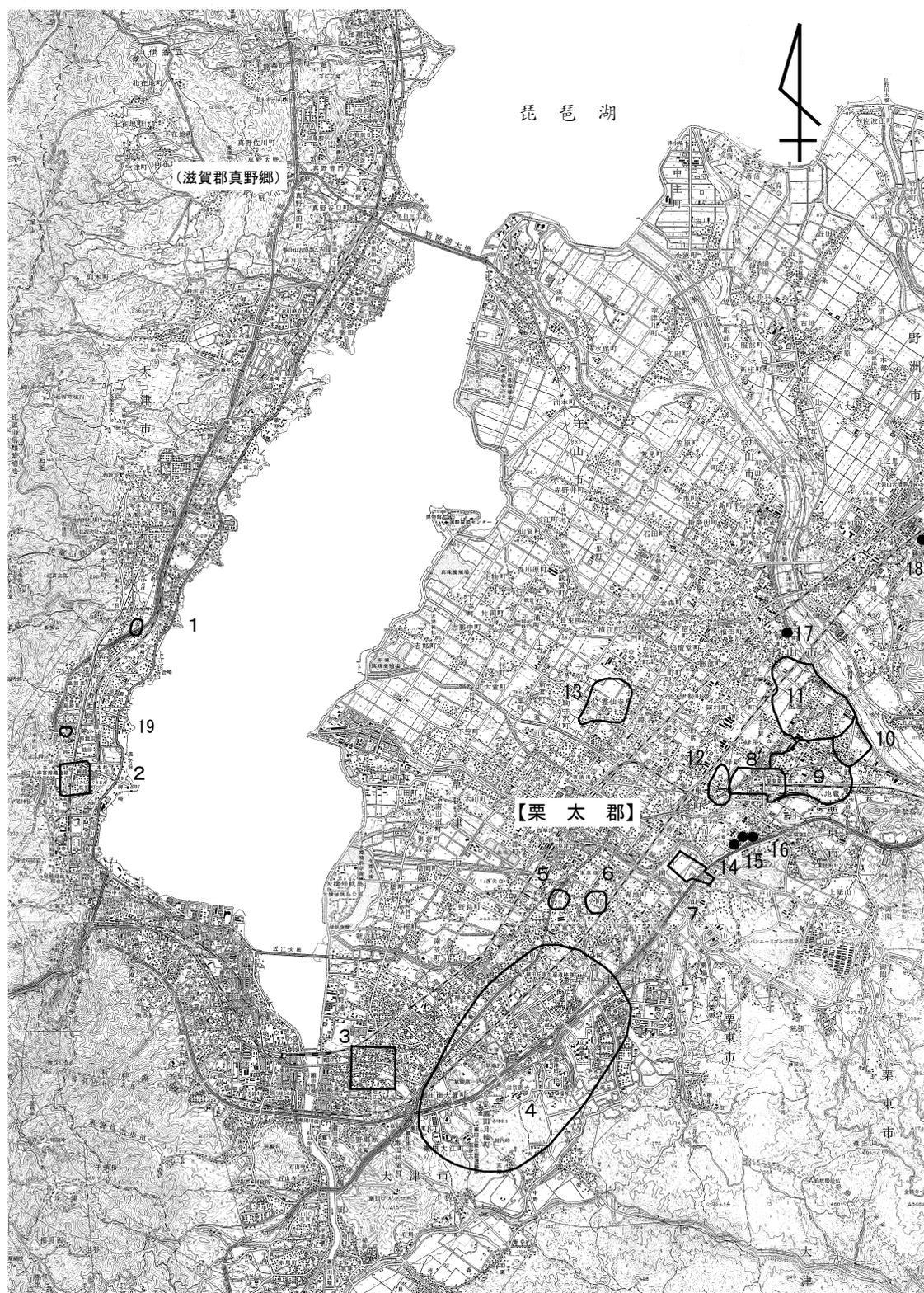


図7 東北系土器と瓦



- |                   |                   |                      |                        |
|-------------------|-------------------|----------------------|------------------------|
| 1. 穴太廃寺跡          | 6. 大將軍遺跡 (栗太郡衙関連) | 11. 辻遺跡              | 16. 安養寺山笹古墳 (須惠質有蓋長胴棺) |
| 2. 大津宮跡           | 7. 岡遺跡 (栗太郡衙)     | 12. 下鉤東遺跡 (蜂屋寺跡)     | 17. 立入古墳 (須惠質有蓋長胴棺)    |
| 3. 近江国府跡          | 8. 手原遺跡 (栗太郡衙関連)  | 13. 靈仙寺遺跡 (栗太寺推定地)   | 18. 甲山古墳 (金銅製双魚佩)      |
| 4. 瀬田丘陵生産遺跡群      | 9. 高野遺跡           | 14. 灰塚山古墳 (須惠質有蓋長胴棺) | 19. 南滋賀廃寺跡             |
| 5. 矢倉口遺跡 (栗太郡衙関連) | 10. 岩畑遺跡          | 15. 新開西古墳 (須惠質有蓋長胴棺) |                        |

縮尺：12万分の1

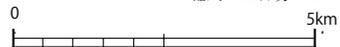


図8 近江の遺跡分布

処理の施されたいわゆる有段丸底坏で、滋賀県内に類例はまったく見当たらない。

【資料1】集落跡の流路から、7～8世紀の在郷土器類と共に出土した(図7-1)。全体の2/3が遺存。器形は、身の深い半球形を呈し、内面には、外面の段に対応するくびれが無い。この特徴は、金属器碗を意識したことを示す。法量は、口径13.2cm、器高5.4cmを測る。外面は、口縁部横ナゲ、体部手持ちヘラケズリである。胎土中に白色砂粒を含み、海綿骨針が観察される。

【資料2】約170m四方に巡る方形区画溝跡から、資料3や7世紀後半の川原寺系軒丸瓦(図7-2)・丸瓦・平瓦と共に出土した。全体の1/4が遺存。未報告資料のため実測図は提示できないが、口径10cmを下回る小型品である。資料1に比べて身が浅く、口縁部が外反する器形を呈し、内面には、外面の段に対応するくびれがある。胎土中に白色砂粒を含み、海綿骨針が観察される。

なお、出土遺構の性格は、古代「蜂屋寺」に関わる施設と推定されている(栗東市教育委員会2006)。

【資料3】出土遺構・相伴遺物は資料2と同じ。全体の1/3が遺存。未報告資料のため実測図は提示できないが、やはり口径10cmを下回る小型品で、口縁部は内湾する。胎土中に白色砂粒を含み、海綿骨針が観察される。

(2) 類例と実年代

それら3点は、有段丸底の基本器形と、同一の器面調整・胎土の特徴を有し(註7)、資料1と

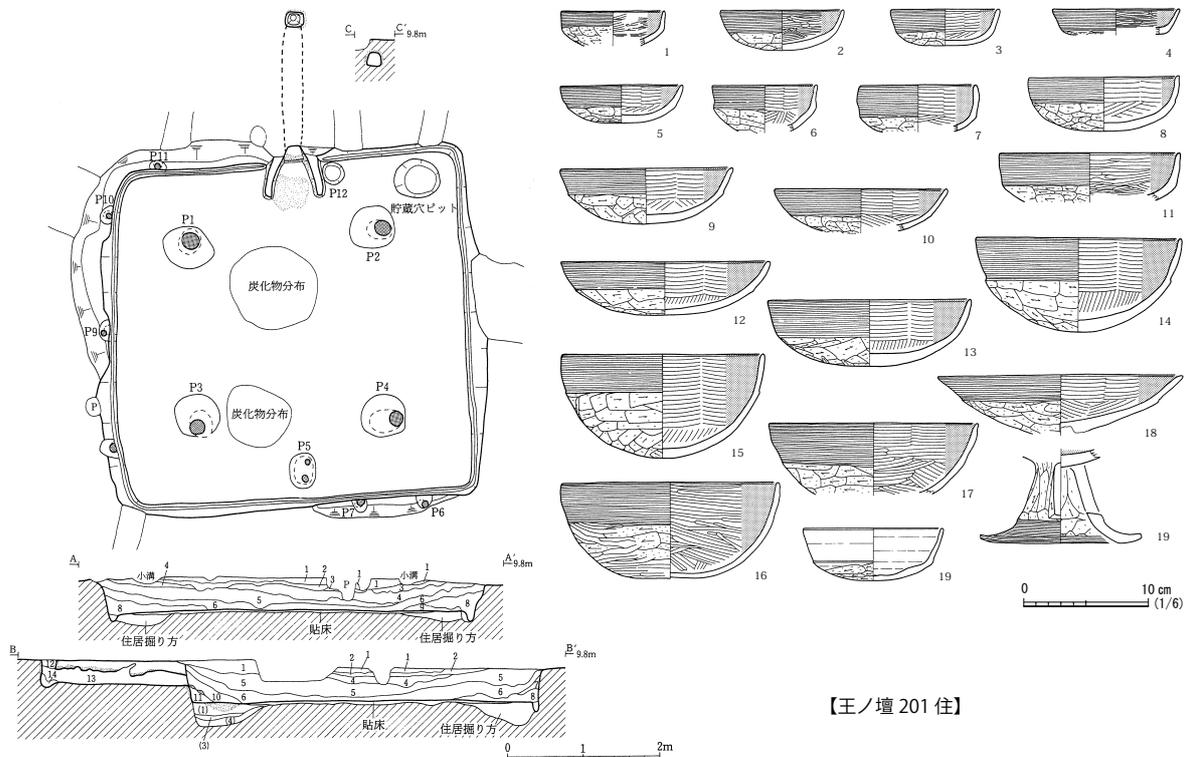


図9 東北系土器の類例①

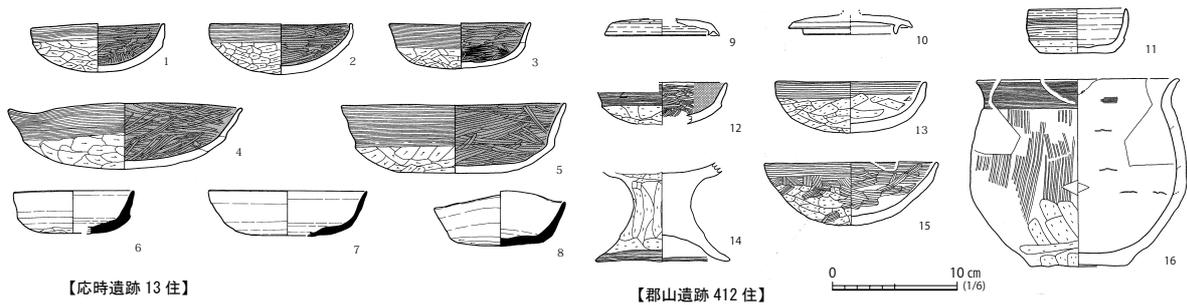


図10 東北系土器の類例②

資料2・3の出土地点は、直線距離で2.8 kmしか離れていない(図14)。このことから、生産地の範囲が狭く、年代の幅が短い、同じ契機で搬入された土器であるという、見通しが得られる。

具体的にみていくと、まず資料1の類例はあまり多くないが、7世紀中葉～後半の陸奥中・南部に散見することができる(図9-14～17)。仙台市王ノ壇201号住居跡の一括土器群では、「重ね椀」状態となる同一器種の多様な法量分化が認められ、まさに金属器指向の具体的様相が読み取れる(註8)。同指向の坏は、8世紀に入ると平底化し、両面へラミガキ+黒色処理が施されるようになるので、そこまで年代が下ることはない。

資料2・3は、7世紀中葉～後半の陸奥中・南部で普遍的な類例があり、一部、8世紀初頭まで残る事例が認められる(図9-1～7、図10-1～3、12)。小型化した法量は、併行期の須恵器坏の変化に連動したもので(飛鳥Ⅱ～Ⅲ型式期)、土師器ではそれがやや遅くまで続いたと考えられる(菅原2007 a)。

以上から、3点の類例は陸奥中・南部に分布が集中し、年代的に、ほぼ7世紀中葉～後半中心にまとまることが判明した。さらに絞り込むと、生産地は胎土中に海綿骨針を含む特徴が、太平洋沿岸に顕著であり(鈴木1984、菊地1994)、仙台湾周辺～浜通り地方からの搬入品と判断される。また年代は、3点の類例が揃う、仙台市王ノ壇遺跡201号住居跡の一括土器群の共伴須恵器(図9-19)を重視すると、7世紀後半に狭まる可能性が高く、この見方は、下鉤東遺跡で共伴した川原寺系軒瓦(図7-2)の年代観とも整合する。

したがって、それらの生産地は宇多・行方郡を含む限定された範囲となり、しかも年代は、近江の官営製鉄所の技術体系が武井・金沢製鉄遺跡群に導入された頃に重なる、と言える。

## 6 西国出土の東北系土器

西国で東北系土器が出土するのは、稀である。管見に触れたのは、わずかに4ヶ国5遺跡の事例に過ぎない。ここでは参考までに、それらに対して、どのような評価が与えられているのかをみておきたい。

A：大和国(飛鳥石神遺跡) 53点の坏が出土(図11)。年代は、7世紀後半～8世紀初頭にまたがり、特定地区に集中する。その多くは搬入品である(巽1997)。

B：讃岐国(森広遺跡) 13点の坏が出土(図12)。年代は、8世紀前半に比定される。胎土

は在地のものとは異なるが、搬入品の可能性は低いという。遺跡の性格は、駅屋である（片桐 1997）。

C：讃岐国（讃岐国府跡） 5点の坏が出土（図 12）。年代は、8世紀後半に比定される。胎土は在地のものとは異なり、搬入品を含む（片桐 1997）。

D：豊前国（黒添赤木遺跡） 7点の坏、4点の甕

が出土（図 13）。加えて、出土住居跡の柱配置やカマド構造にも、東北と共通した要素が確認されるという。遺跡の性格は集落である（小田 2008）。

E：筑後国（筑後国府跡） 坏が出土。年代は、8世紀後半に比定される（註9）。

以上のうち、Aは、飛鳥寺西の「斎規の広場」で行われた蝦夷の服属儀礼を示す『日本書

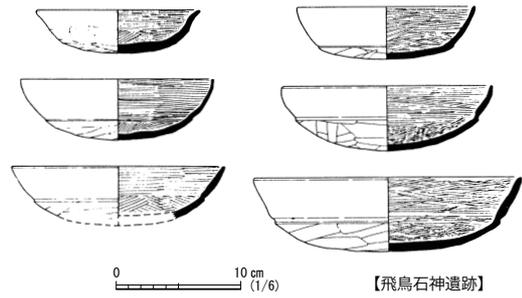


図 11 西国の東北系土器①

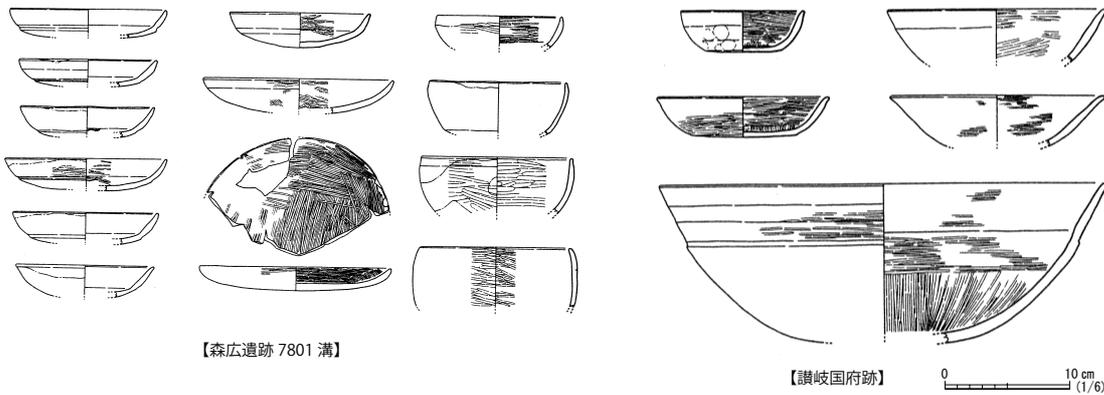


図 12 西国の東北系土器②

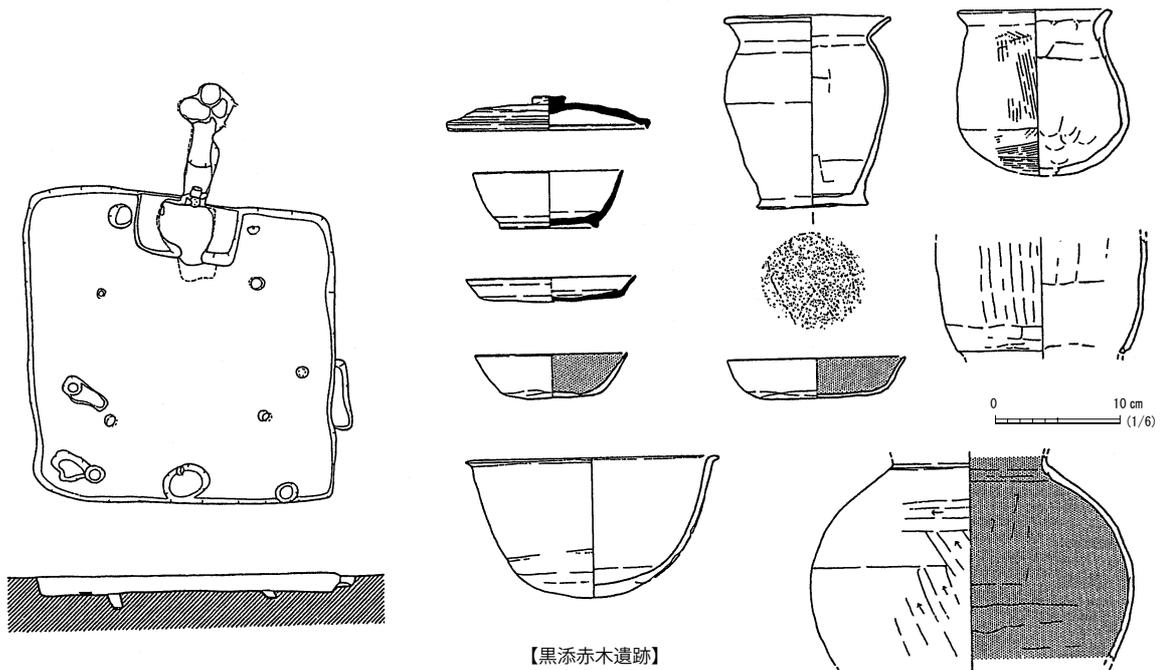


図 13 西国の東北系土器③

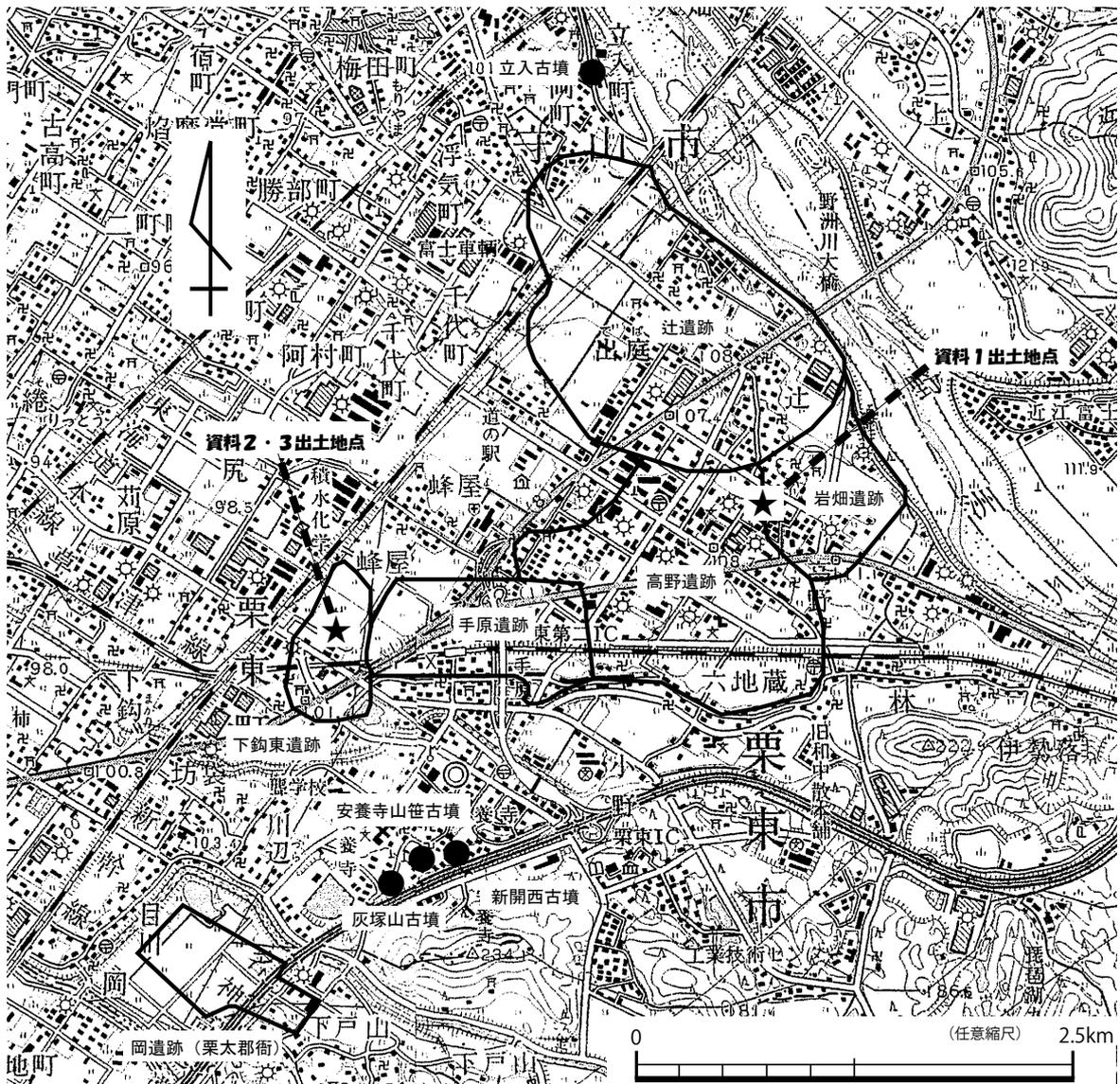


図14 東北系土器の出土地点

紀』、『続日本紀』657～700年の記事、Bは、陸奥国俘囚を伊予国・筑紫へ移配した『続日本紀』725年の記事、C・D・Eは、出羽国俘囚を大宰府管内と讃岐国へ移配した『続日本紀』776年の記事に、それぞれ対応する。

それに対して、今回取り上げた土器は、近江に7世紀後半の蝦夷服属儀礼の場や俘囚移配の史料記録が無く、また、傍証する考古学的材料も見当たらない。したがって、いずれの可能性も棄却される。

## 7 なぜ近江で出土したのか

では、どのような経緯で、それらは搬入されたのだろうか。

滋賀県栗東市は、律令期の近江国栗太郡にあたり、かねてから武井・金沢製鉄遺跡群の技術体系の故地とされる官営製鉄所＝瀬田丘陵生産遺跡群を抱えたところである(図8-4)。高野・岩畑遺跡と下鉤東遺跡の位置は、この官営製鉄所の北東5～7kmの範囲に広がる官衙関連遺

跡群内にあり（図14）、周囲には、8世紀中葉の鉄生産に関与した宇多郡官人の火葬墓に影響を与えた終末期古墳（菅原2010 a）が、分布している（図8-14～17、図14）。

また雨森智美氏によると、高野・岩畑遺跡は、古墳時代から継続する伝統的な技術者集団の居住域であり、中核となる高野神社の摂社（八重釜・敏釜神社）は、鉄生産に伴う神とも関連付けられ（図15）、8世紀前半には瀬田丘陵生産遺跡群に人材を提供したという（雨森2007）<sup>（註10）</sup>。当然、その関係は、7世紀後半に遡る可能性を十分に有している。

こうした複数の状況証拠から、3点の東北系土器は、宇多・行方郡から近江へ技術習得に派遣された工人が、現地に残した痕跡とみるのが最も合理的な解釈と考えられる。資料1は、彼らが一定期間滞在した瀬田丘陵生産遺跡群の製鉄集団居住域に廃棄したもの、また、資料2・3は、最寄りの寺院に参詣した際に納めたものと推定されよう。

これは、鳩山I期の事例に対して、ちょうど逆向きの工人の動きを示す物証である。

### 小 結

以上のことから、武井・金沢製鉄遺跡群の生産は、帰郷・帰郷指導型によって開始されたことが判明した。

この結論は、併行期の須恵器生産のあり方や、先学の想定とは異なるが、きわめて軍事・政治的性格の強い鉄生産の開始は、須恵器生産の場合とまったく別のランクであったこと、また直接的には、当時の瀬田丘陵生産遺跡群が近江宮造営（667年）を契機に設立されたばかりであり（大道2007、藤居2007）、技術指導のための工人を派遣できる余裕が無く、むしろ、多数の上番労働力を必要としたことが、理由として考えられる。おそらく、当時の瀬田丘陵生産遺跡群は一大研修センターの役割を果たし、中央と在地技術基盤の無い東国各地における同一体系の共有化が、一体的政策で進められたと推定される。

ただ、そうであれば、尾張や武蔵・常陸などの工人の痕跡もどこかに残されている可能性があり、ここでは、東北の土師器が黒色土

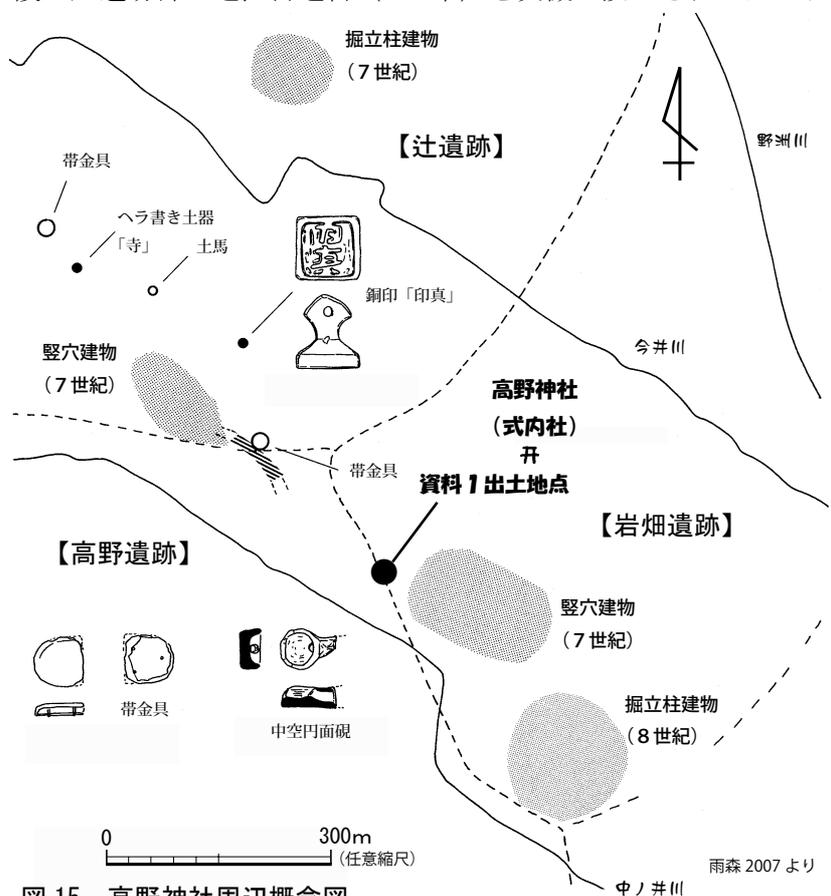


図15 高野神社周辺概念図

雨森2007より

器という、破片でも目につきやすい特徴を備えていることに一応の解決を求めておきたい。

また、それと共に、技術導入後の鉄生産に関東の影響が及んだのは間違いなく（38・39頁：事例2～5）、近江の技術体系に、関東の要素が複合して独自色を形成していったという、従来の変遷観（安田2005）には変更が無いことを、併せて指摘しておく。

## 8 近江に派遣された工人の出自はどこか

では、当初の課題に結論が得られたところで、派生する問題に触れていきたい。

まず取り上げるのは、遠く近江へ派遣された工人がどのような出自であったのかという、素朴な疑問である。ここで手掛かりとなるのは、7世紀後半から武井製鉄遺跡群と一体的生産を行った善光寺窯跡群の存在と思われる。同窯跡群は、乙巳の変（645年）を挟んで継続展開した東北唯一の窯業生産地であり（7世紀前半～8世紀前半）、関東まで視野を広げても

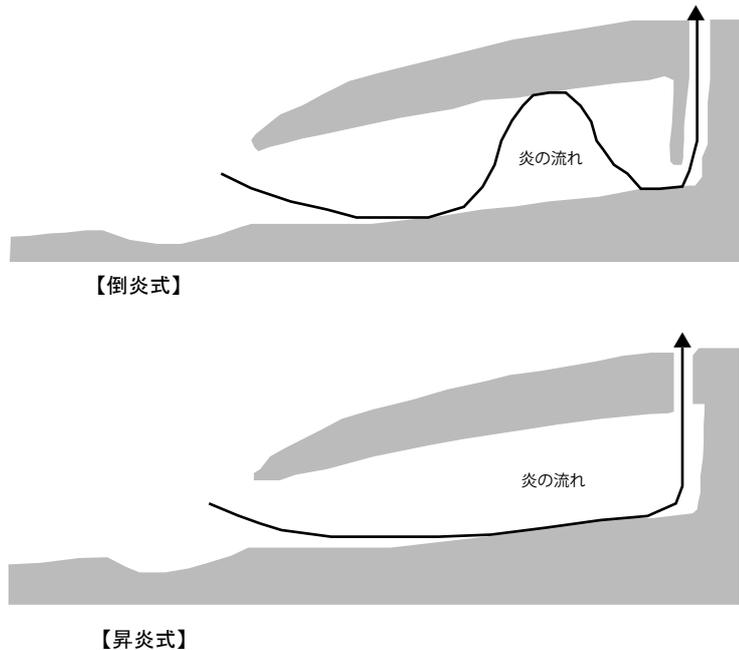


図16 倒炎式と昇炎式

稀有な存在と言える。在地基盤の無い製鉄技術を導入するためには、多少なりとも接点を持つ工人の派遣が最もリスクは少なく、当時の陸奥国では、大きな窯を築き、炎をコントロールする技術に卓越した善光寺窯跡群の須恵器工人が、有力な候補として浮かび上がる。

また、須恵器工人と製鉄工人が不可分であったことは、既に、カマド構築材に丸瓦を転用した武井製鉄遺跡群の工房例などから想定されており（飯村2005）、何より、それは木炭窯の煙道構造から直接窺うことができる。つまり、武井・金沢製鉄遺跡群では、横口式木炭窯を導入した7世紀後半のうちに、須恵器窯と同じ昇炎式の審窯式木炭窯に全面転換してしまうが（図16下）、審窯式木炭窯は現代の民俗例に至るまで、倒炎式の煙道構造を備えるのが原則であり（同図上）、当時の陸奥南部の状況は特殊である（（財）福島県文化振興事業団2008）（註11）。

こうしたことから、近江に派遣されたのは善光寺窯跡群の須恵器工人と推定され、彼らが宇多・行方郡に製鉄技術を広める中心的役割を担ったと考えられる（註12）。

## 9 なぜ宇多・行方郡で開始されたのか

次に、当時の律令国家で最北となる鉄生産（註13）が、なぜ宇多・行方郡で開始されたのかを検討したい。この課題は、善光寺窯跡群の存在に加え、佐川正敏氏が、東北最古の寺院の1つ（黒木田遺跡＝後の郡衙周辺寺院）が宇多郡に営まれた理由を、初期陸奥国の中で、「蝦夷領域

と接する一番北のあたり」であり、「天然の良港に近い」と発言しているのが、参考になると思われる（佐川 2008）。これは、武井・金沢製鉄遺跡群の立地に、そのまま当てはまる。

さらに、増して重要な理由は、近江との伝統的な交流関係が背景として考えられる。

【事例 1】鹿島町真野寺内 20 号墳（図 2-8）出土の金銅製双魚佩（図 17）は、6 世紀前半に比定され、同年代の類例の分布が、いずれも近江出自の継体王朝と関係の深い古墳に集中している（滋賀県高島町鴨稻荷山古墳・同甲山古墳（図 8-18）、千葉県木更津市長須賀古墳）。また、「真野」の地名の由来となった和邇氏の一族＝真野氏は、継体王朝との関わり強く、本貫地は近江国滋賀郡真野郷（図 8）に推定されている（穴沢・中村 1972、穴沢・馬目 1985）。

【事例 2】相馬市黒木田遺跡（図 2-5）の創建瓦は、滋賀県大津市前期穴太廃寺跡（図 8-1）の瓦と、きわめて類似する（図 18-1・2）。年代は、7 世紀中葉：7 世紀前半で接近しており（木本 1989）、直接的な伝播と考えられる。なお、黒木田遺跡の創建年代は、宇多郡の成立期（前期立評）にあたり、鉄生産開始の前段階に位置づけられる。

【事例 3】事例 3 で取り上げた、真野寺内 20 号墳のすぐ南側には、高句麗系瓦（図 18-3）を出土した寺院跡（真野古城跡、図 2-9）が存在する（藤木 2009 a）。瓦の年代は不詳であるものの、比較的類似した瓦が滋賀県栗東市霊仙寺遺跡（図 8-13）など、7 世紀後半の近江の寺院跡に確認できる（註 14）。しかも、様式的に真野古城跡の瓦の方が整っており、事例 2 と横並びの年代で、直接のモデルが近江のどこかに埋もれている可能性がある。

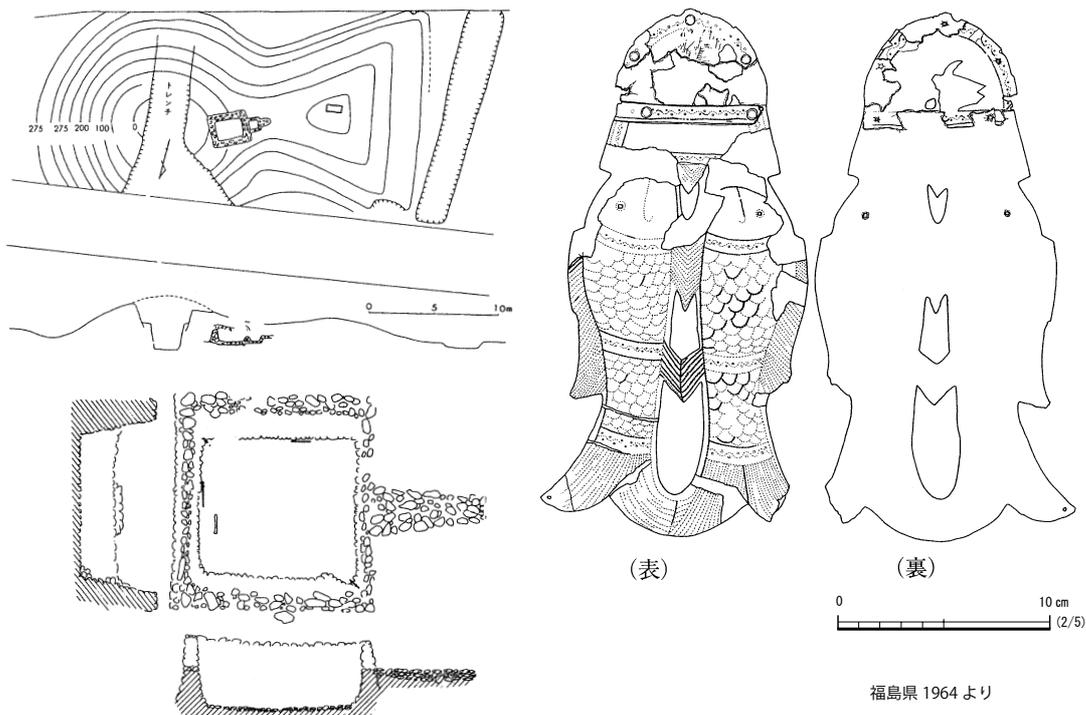


図 17 真野寺内 20 号墳

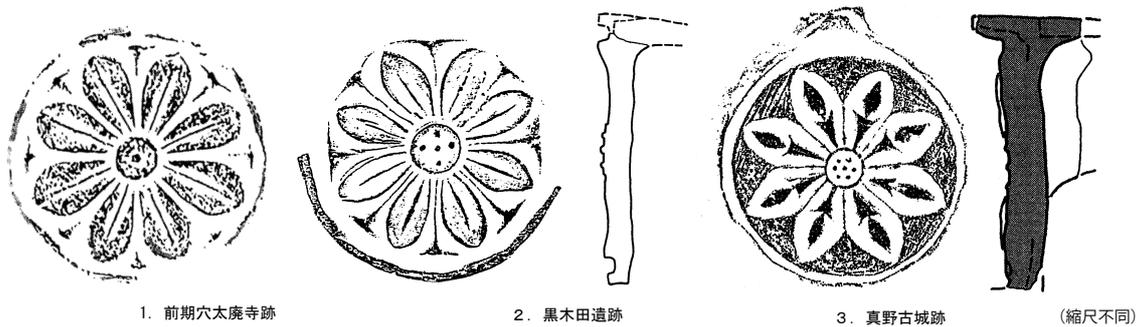


図 18 近江関連の瓦

【事例 4】 8 世紀中葉の鉄生産に関与した宇多郡官人の火葬墓（図 2 - 7）に、近江の製鉄集団の墓制の影響が認められる（菅原 2010 a）。

これまで事例 1・2 は、鉄生産との関連が想定されても（(財) 福島県文化センター 1985・1995）、その後表立って追認されることはなかった（註 15）。しかし、今回、善光寺窯跡群の須恵器工人が、近江の瀬田丘陵生産遺跡群へ技術習得に直接派遣されたことが実証されたのを受け、ようやく積極的評価が可能になったと思われる。このことから、7 世紀後半に行われた製鉄技術導入は、6 世紀後半以来の交流関係を背景に実現したものと考えたい。おそらく、7 世紀前半に稀有な窯業生産地を設立できたのも（善光寺窯跡群）、この先進地とのつながりを持つ地域性が有利に働いたのではないだろうか（註 16）。

また、事例 2・3 から、前段階の 7 世紀中葉には近江との交流が多面的に及んでおり、製鉄技術導入は、その流れの延長上に位置付けられることが分かる。ちなみに、7 世紀中葉の仙台平野では、陶邑窯の直接的影響を受けた窯の存在が想定され（菊地 1994、図 19）、成立直後（7 世紀中葉～後半）の陸奥国⇌前期評段階にとって、途中地点を経由しない中央との関係が重要な役割を果たしていたことが窺える。従来、7 世紀の遠隔地間交流は関東ばかり目が向けられてきたが、筆者が繰り返し主張する信州北部～北陸に加え（菅原 2004・2007 a・2010 b）、今後は、畿内も視野に入れていく必要があると思われる。

さらに、事例 4 から、この遠隔地間交流の影響は、製鉄遺跡が阿武隈丘陵側へ拡散し始める直前の 8 世紀中葉まで残ったことが知られる。

## 10 経営主体はどこか

次に、鉄生産の経営主体を検討したい。この課題は、陸奥国あるいは宇多・行方郡のどちら側に、それがあつたのを巡って、議論が繰り返されてきた（(財) 福島県文化センター 1989・1995・能登谷 2005、藤木 2009 b）。とくに、金沢製鉄遺跡群は行方郡衙の至近距離に位置し、「厩酒坏」墨書土器の出土所見などから、郡衙との密接な関係は誰の目にも明らかである。

しかし、両製鉄遺跡群の生産開始年代は、飛鳥Ⅲ型式期併行 = 670～680 年代に比定され（図 21）、全国的に居宅と郡衙が未分化な段階に位置づけられる（大橋 2009）（註 17）。つまり、定型的な宇多郡衙も行方郡衙もまだ存在しておらず、在地側に、中央の官営製鉄所へ須恵器窯工人

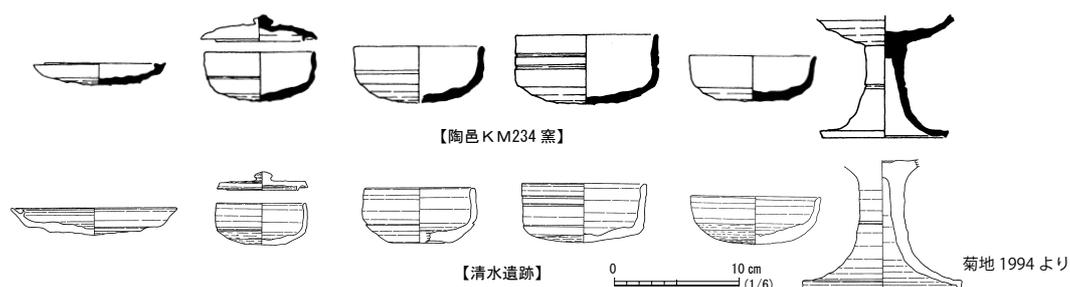


図 19 仙台平野の須恵器と陶邑

を派遣させる実力があつたとは、到底考えられない<sup>(註18)</sup>。当時の陸奥国に唯一存在した定型的な官衙は、日本海側の淳足・磐舟柵と双子関係にある城柵＝仙台市郡山遺跡Ⅰ期官衙のみであり、鉄生産開始を決定したのは、ここに滞在した中央からの派遣官人＝国宰において他にあまりない。

したがって、導入を可能にした背景は在地側に存在しても、経営主体は陸奥国側にあつたと考えられる。

こうした陸奥国と宇多・行方郡の特別な結びつきは、近年、具体的根拠が得られている。7世紀後半～末葉の宇多郡では、善光寺窯跡群の平瓦が郡山遺跡Ⅰ期官衙に供給されたこと(図20)<sup>(註19)</sup>、次いで、7世紀末葉～8世紀初頭の行方郡では、郡庁院前庭に初期陸奥国府＝郡山遺跡Ⅱ期官衙と同じ玉石敷き荘厳が施され(図22-1)、郡衙周辺寺院に、郡山廢寺跡と同一系譜の軒丸瓦(同図4)、ならびに同一工人製の円面硯(同図2・3)が使用されたことが、判明している。

したがって、上で想定した両者の関係は、確定的とみなすことができる。

## 11 瓦からみた「近江」－「陸奥国」－「宇多・行方郡」

ところで、郡山遺跡Ⅱ期官衙と関係の深い行方郡衙について、藤木海氏は、「(初期陸奥)国府の出先施設としても機能し、また石城国成立(718～720年)の段階では(石城)国府機能の一部を代行したのではないだろうか。」と大胆な提言をしている(藤木2009b)。

ここでは、さらに一步踏み込んで、近江との関連を示す興味深い資料を提示したい。郡山遺跡Ⅱ期官衙を引き継いだ陸奥国府＝多賀城の創建期鬼板(723年～8世紀中葉)は、近江宮関連の南滋賀廢寺跡(図8-19)＋滋賀県愛荘町塔ノ塚・野々目廢寺跡の瓦の文様モチーフを組み合わせた構成になっている<sup>(註20)</sup>。一方で、行方郡衙周辺寺院の鬼瓦とも、アーチ型の形態、周辺文様、裏面の「簀の子」状圧痕が共通しており、製鉄技術導入における3者の関係を、反映した可能性がある(図23)。この仮説は、多賀城創建期の瓦の祖形を、郡山廢寺跡の瓦に求める従来の見解(福島県立博物館1988、日本考古学協会2010)に抵触してしまうが、同廢寺跡の瓦に類似した花卉先端が尖るタイプは、多賀城創建期の瓦の1%に満たず(宮城県多賀城跡調査研究所1982)、これまで示した鉄生産を巡る状況証拠を踏まえると、単なる偶然とは考えられない<sup>(註21)</sup>。

実は、この頃の瀬田丘陵生産遺跡群は生産量のピークを迎えており(滋賀県教育委員会

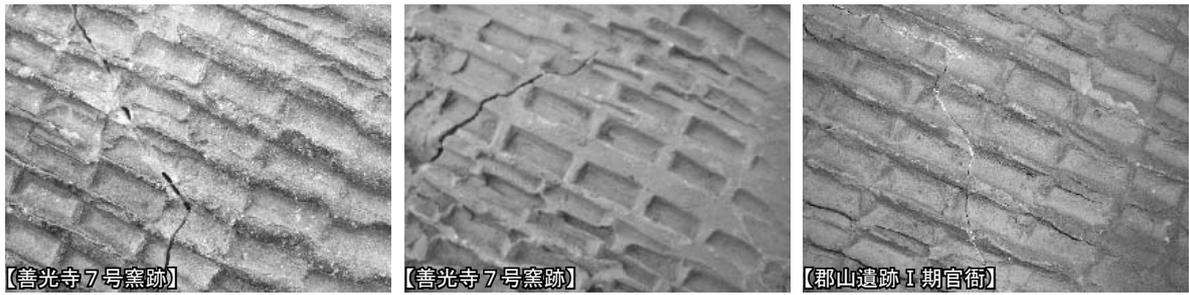


図20 善光寺窯跡と郡山遺跡の平瓦

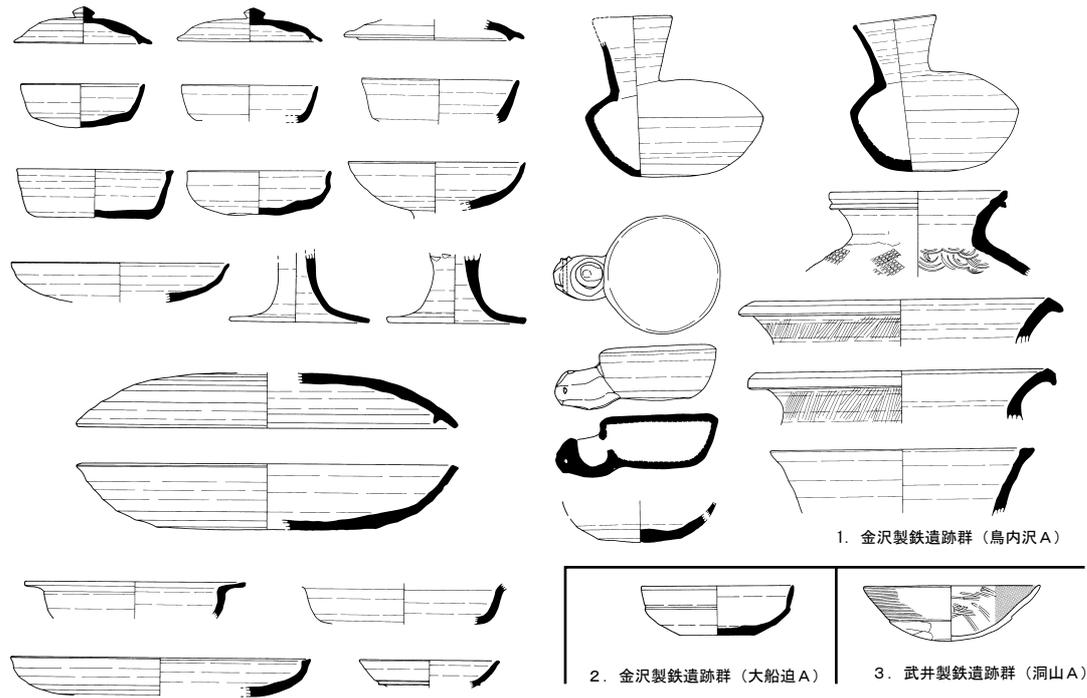


図21 生産開始年代を示す資料

2006、大道 2007、藤居 2007)、導入後も何らかの形で続いていた多面的な交流がクローズアップされた可能性を指摘することができる(註22)。蝦夷の反乱(720年)

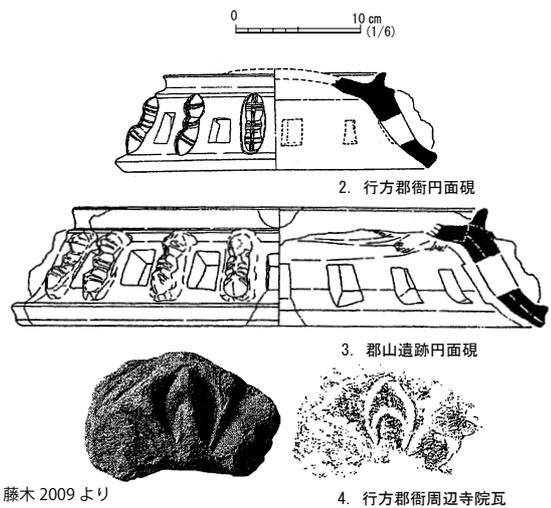
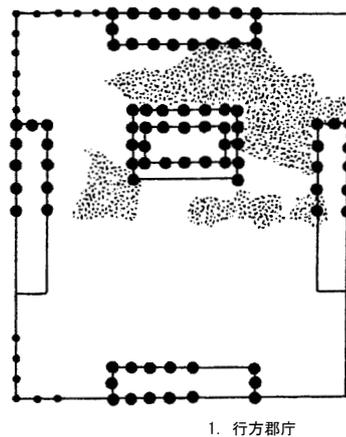


図22 行方郡衙と郡山遺跡

を契機に新たなスタートを切った陸奥国府にとって(熊谷 2000)、近江宮関連の文様意匠を屋瓦に飾ることは、象徴的意味合いを持っていたと推定される。

そして、鉄生産の実務を担った行方郡衙では、多賀城の文様意匠をさらに稚拙な技術で真似たと考えられる。

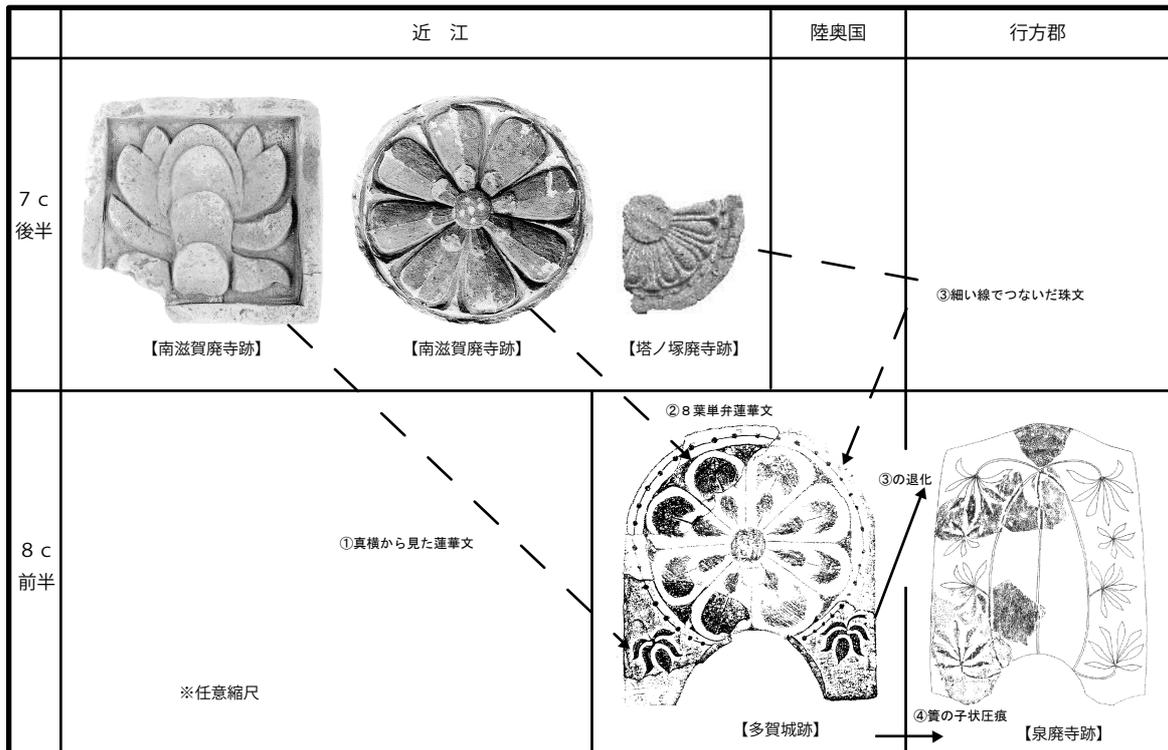


図 23 瓦のつながり

## 12 宇多郡と行方郡の違い

最後に、2つの視点から、宇多郡と行方郡の鉄生産の違いに触れておきたい。

### (1) 善光寺窯跡群との距離関係

まず、善光寺窯跡群との距離関係に注目する。宇多郡の武井製鉄遺跡群は、この近江の製鉄技術体系をもたらした工人の本貫と至近距離にあり、両者は継続して一体的生産を行った。それに対して、行方郡の金沢製鉄遺跡群は遠距離で、須恵器生産は、畿内からの巡回工人による単発焼成（図 21 - 1）で終わる（服部 1995 b）。このような違いは、近江系譜の横口式木炭窯の検出数とも対応しており、武井製鉄遺跡群の 7 基に比べ、調査面積が 5 倍に及ぶ金沢製鉄遺跡群では、わずか 1 基にとどまっている。

このように、善光寺窯跡群との距離関係は、そのまま同窯跡群の須恵器生産ならびにその工人が近江からもたらした製鉄技術体系との関係の深さに比例している（註 23）。

### (2) 伝統的な地域圏構図との関係

次に、この結論を踏まえて、伝統的な地域圏構図との関係に注目したい。本拠地型の宇多郡では、政治権力と手工業生産の場が棲み分けした古墳時代のあり方が引き継がれ、武井製鉄遺跡群は善光寺窯跡群近辺（図 2 - 3・4）、郡衙は旧浮田国造の中心領域内（同図 5・12）に、それぞれ所在する（同図 5 近辺）。

一方、非本拠地型の行方郡では、金沢製鉄遺跡群が空白地に造成され（同図 10）、郡衙はその前面に整備された（同図 11）。この政治権力と手工業生産の場が接近した位置関係から、鉄

生産により特化した行方郡の性格が窺え、単発で終わる金沢製鉄遺跡群の須恵器生産に消極的なあり方は、それに符合するものと言える。

そうすると、このような状況証拠から、行方郡の立郡（評）目的そのものが、鉄生産コンビナートの設置にあった可能性が推測される。つまり、陸奥国宰は、（旧）浮田国造の力を借りて近江から製鉄技術を移植し、彼の本拠地に鉄生産コンビナートを置いた一方で、より専門性の高い、大規模なコンビナートの設置を、伝統的な地域圏構図にとらわれる必要の無い非本拠地側で行ったのではないだろうか。

善光寺窯跡群との関係が、金沢製鉄遺跡群では武井製鉄遺跡群に比べて希薄なこと、また、陸奥国最高機関（城柵・陸奥国府）との関係を示す痕跡が、宇多郡（図 20、7 世紀後半）→行方郡（図 22・23、7 世紀末～8 世紀前半）の順に変化するの、その後の経緯の反映とみられる。さらに、行方郡が常陸行方郡と同一地名であり、両地域間に多数の同一字名があるのも、同様の背景と考えられ（鈴木 2010）、考古学的に証明するのは難しいが、おそらく、宇多郡をはるかに上回る人員が金沢製鉄遺跡群の運営のため、この遠隔地から投入されたと推定される。

以上のように、両郡の鉄生産には、初期律令国家の地方支配を色濃く反映した違いが認められる。これは、先に、鉄生産の経営主体を在地側でなく、陸奥国側に求めた見方に、合致するものである。

その後、宇多・行方郡の鉄生産は、対蝦夷戦争の終結より大きく転換し、窖窯式木炭窯の構造にも一部変化が起きるが<sup>（註 24）</sup>。今回の新知見（図 7 他）がもたらした情報の価値は、長く基本的性格を規定することとなった生産開始時の具体的動向を探る上で計り知れない。その歴史的背景をさらに掘り下げていくことが、今後の重要な課題であることを指摘して、小論の結びとしたい。

### 13 おわりに

当館には、武井・金沢製鉄遺跡群をはじめ、律令期の鉄生産に関わる膨大な遺物・写真・図面類が収蔵されている。故藤本強前館長は、イベント「鉄づくり」などを通して、県民にその重要性をわかりやすく発信することに、尽力された。開館以来のご指導に感謝申し上げ、職員一人として、ご冥福をお祈りしたい。

なお、小論の作成にあたり、多くの機関・団体・個人にご協力をいただいている。記して感謝申し上げたい。

愛荘町立歴史文化博物館 考古学研究会 仙台市教育委員会 奈良文化財研究所 宮城県多賀城跡調査研究所 栗東市教育委員会 赤川正秀 雨森智美 小川淳一 大道和人 小田正利 北村圭弘 佐川正敏 田中広明 菱田哲郎 藤木海 古川一明 三井義勝 柳沼賢治

## &lt;註&gt;

- (註1) 小論では、主に7世紀後半を扱う。したがって、「評」と記述すべきであるが、煩雑さを避けるため、原則「郡」の記述に統一する。
- (註2) 概要を示すと、宇多郡官人の火葬墓(図2-7)は東北最古に位置付けられ、納められた蔵骨器(図1-1)は、土師器甕に4個の耳を付け、須恵質に焼成した特殊専用器である。これに影響を与えたのは、後述の瀬田丘陵生産遺跡群(図8-4)北西側に集中する終末期古墳と考えられる(図8-14~17)。主体部に使用された須恵質有蓋長胴棺は、土師器羽釜がモデルで、様式的に最も古い事例(図1-2)には、やはり4個の耳が付く。  
ちなみに、東北で2番目に古い火葬墓は、武井・金沢製鉄遺跡群内に営まれており(香川1996)、古墳に替る新たな墓制は、鉄生産に伴って、最初に宇多・行方郡へ伝播したことが窺える。
- (註3) 真野郷域には、「浮田」の地名が残る。宇多郡域に、国造本拠地が落ち着く前の状況を探る上で、示唆的と思われる。ただし、後述する真野寺内20号墳は、前方後円墳(図2-8)であるものの、規模は決して大きくない。また、遺物も金銅製双魚佩(図17)を除くと、貧弱である。
- (註4) これは、中心一周辺間の見方としては有効であるが、在地間の工人の動きはもっと複雑である(津野1997、渡辺2006)。
- (註5) ただし、「玉突き」型は明確な中心を持たないと定義されている。したがって、伝播の過程はよく似ていても、明確な中心(近江の官営製鉄所)を持つこの場合は、「玉突き」型そのものではない。
- (註6) 資料1は、既に報告書が刊行され(栗東市教育委員会2010)、資料2・3は、2011年度に刊行予定である。今回、資料1の実測図掲載と資料2の概要公表について、滋賀県栗東市教育委員会ならびに雨森智美氏から特段のご配慮を頂いた。
- (註7) 厳密に言うと、資料1は、資料2・3に比べて胎土がやや精選され、焼成状態が良好な印象を受ける。これは、金属器腕を意識したためと考えられる。
- (註8) 仙台市教育委員会の所蔵資料を実見し、その際、木村浩二氏にご協力いただいた。ちなみに資料1は、この土器群と細部の質感が違い、工人は別と考えられる。誤解の無いように、触れておく。また、十分に精査していないので、本文中に記さなかったが、壁柱穴が巡る出土住居跡の構造は、近江~北陸に類例が多い(畑中1995、北野1997)。報告書作成時に、担当の小川淳一氏からご教示いただいたことがあり、重要な視点と考えられる。
- (註9) 赤川正秀氏(福岡県大刀洗町教育委員会)と小田和利氏(九州歴史資料館)から、ご教示いただいた。
- (註10) この見解から、須恵質有蓋長胴棺を伴う終末期古墳は、瀬田丘陵生産遺跡群に関わる製鉄集団の墓地であることが、追認される。  
なお、7世紀中葉の事例は、同生産遺跡群の成立前の造営とみられるが、同一技術者集団の連続的な墳墓であることから、問題は無い。
- (註11) 煙道構造は、炎の流れを左右する要素だけに、問題は大きい。しかも、宇多・行方郡を含む浜通り地方では、律令期の鉄生産の終末(10世紀前半)まで昇炎式に固執する。  
なお、昇炎式と倒炎式の定義は、藤原学氏の研究成果に基づいている(藤原1999)。
- (註12) 東国の他地域でも、須恵器工人が派遣された可能性は、十分に想定される。武井製鉄遺跡群と同じように、7世紀前半開始の窯業生産地近隣で、7世紀後半から鉄生産が同居するパターンが、東国各地で確認されるのは、このことをよく示している(群馬県太田市菅ノ沢遺跡、石川県小松市南加賀窯跡群など：駒澤大学考古学研究室2009、望月2006)。  
そうすると、宇多・行方郡にみられる現象は、工人の保守的性格に要因があると思われ、製鉄炉の送風装置に、他地域ではみられない古墳時代以来の土製羽口(鍛冶用)が多用される点と、対応する。
- (註13) 仙台平野で鉄生産が開始されるのは、城柵分布の中心が大崎平野へ北上する8世紀前半に遅れる(利府町大貝窯跡)。しかし、一方で須恵器生産は7世紀前半に単発で開始されており(多賀城市市川橋遺跡)、ここにも、鉄生産の持つ軍事・政治的性格の強さがあらわれている(45頁：16・17行)。
- (註14) 北村圭弘氏(滋賀県教育委員会)にご教示いただいた。  
なお、上野国佐位郡では、上植木廃寺跡(7世紀後半造営)の中軸線上に乗った、北側500mの位置に、本関町古墳群6号墳が所在し、両者の同族関係が指摘されている(出浦2011)。本例は、この関係になぞらえることができる。

- (註15) 金銅製双魚佩の評価も、現在はほとんど議論の対象にあがらない。
- (註16) 当時の善光寺窯跡群に、近江の直接的な影響は認められない。むしろ、前述したように、製品には関東の強い影響が確認される。また、窯構造は、全国で画一的に波及した排煙調整溝付き窯が採用されており(菅原 2010 b)、菱田説に従うと、「玉突き」型となる。
- ところで、7世紀前半は律令社会形成の起点であり(菅原 2004・2007 b)、善光寺窯跡群の生産開始も、5世紀後半以来途絶えていた須恵器生産を再開させ、以後、継続展開する点で、その1つと評価できる(菅原 2010 b)。この歴史的背景に、佐川氏が黒木田遺跡の造営理由にあげた地理的要因を加えると、東日本で稀有な窯業生産地が、7世紀前半の宇多郡域で開始された理由が説明できると思われる。
- (註17) 生産開始年代の上限を7世紀中葉に遡らせる考え方もあるが、図21を見る限り、困難と思われる。また、武井・金沢製鉄遺跡群の技術系譜が、近江宮設置(667年)を契機に整備された瀬田丘陵生産遺跡群にあるという基本前提とも、矛盾してしまう。
- (註18) 郡衙下層で建物跡が検出されている。しかし、今のところ面的な広がりはず、埼玉県深谷市熊野遺跡(鳥羽 2004)のような充実した内容は期待できない。したがって、鉄生産の受け皿になった可能性は低いとみられる。ただ、鉄生産開始と同時に行われた須恵器生産では、畿内からの巡回工人による中央様式の製品が焼成され(図21-1)、その供給先が問題となる。おそらく、そこが本格的な郡衙成立前の実務を担当したと推測される。
- (註19) 善光寺7号窯跡の焼き台に転用されたもので、長島榮一氏が指摘している(長島 2000)。今回、仙台市教育委員会の所蔵資料を実見し、事実であることを確認した。
- (註20) 筆者は、10数年前に上田睦氏(大阪府藤井寺市教育委員会)から指摘されたことがある。
- なお、塔ノ塚廃寺跡の瓦写真は、北村圭弘氏(滋賀県教育委員会)が撮影した滋賀県愛荘町立歴史文化博物館の所蔵資料である。掲載にあたり、北村氏、愛荘町立歴史文化博物館、担当の三井義勝氏にご協力をいただいた。
- (註21) ただし、周縁蓮子の形(楔形ないし楕円形)は、明らかに郡山廃寺跡の瓦に類似する。したがって、近江と陸奥在来の要素が複合したことにより、成立した文様構成と考えられる。
- (註22) そうすると、図1に横たわる年代差(1:2~4)は、近江の持つ象徴的意味合い+導入後も続いていた技術交流の背景で、説明することが可能と思われる。前稿(菅原 2010 a)の課題が、これで解決される。
- (註23) 能登谷宣康氏は、金沢製鉄遺跡群最古の製鉄炉・木炭窯を吉備の出自と見なし、その直後に、近江の技術体系が全体を席卷したと推定している(能登谷 2005)。導入期は、試行錯誤が繰り返され、やがて1つの系譜に収斂されていったとみるのは、聞くべき見解である。今後、具体的証明がなされるかどうか、研究動向を見守りたいと思う。
- (註24) 木炭窯本来の倒炎式が、一部出現し、また須恵器生産でも、信州北部~北陸出自の半地下式卓越圏の影響が飛び石的に及んでいる(菅原 2010 b)。この現象は、国家政策でなく、伝統的な豪族間のつながりを背景にしたものと推定される。資料1~3に遭遇するまで、筆者はこの問題を扱った小文の準備を進めていたが、前稿との関係を考慮して今回は見送った。別の機会を設けたい。

<引用・参考文献>

- 福島県 1964『福島県史』6 (考古資料)
- 穴沢味光・中村五郎 1972「福島県真野寺内20号墳に関する考察」『考古学研究』第19巻第1号 考古学研究会
- 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982『多賀城跡 政庁跡 本文編』
- 鈴木敬司 1984「相双丘陵と常磐丘陵」『URBAN KUBOTA 「特集 海成粘土と硫化物」』23 URBAN KUBOTA
- 穴沢味光・馬目順一 1985「福島古墳と横穴」-研究の現状と問題点-『福島の研究 第1巻地質・考古篇』清文社
- 西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

- (財) 福島県文化センター 1987 「三貫地遺跡 (原口地区)」『国道 113 号線バイパス遺跡調査報告Ⅲ』
- (財) 福島県文化センター 1988 「善光寺遺跡」『国道 113 号線バイパス遺跡調査報告Ⅳ』
- 福島県立博物館 1988 『陸奥の古瓦』
- 小笠原好彦・林弘通編 1989 『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 真陽社
- 木本元治 1989 「善光寺・黒木田遺跡及び宮沢窯跡群出土の瓦ー東北地方への仏教伝播期の様相についてー」『福大史学』46・47 合併号 福島大学史学会
- (財) 福島県文化センター 1989 『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』
- (財) 福島県文化センター 1989 「善光寺遺跡 (第 2 次)」『国道 113 号線バイパス遺跡調査報告Ⅴ』
- 菱田哲郎 1992 「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第 39 卷第 3 号 考古学研究会
- 菊地佳子 1994 「多賀城以前の陸奥国と須恵器」『歴史』第 82 輯 東北大学史学会
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- (財) 福島県文化センター 1995 『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅴ』
- 服部敬史 1995 a 「東国における 6・7 世紀の須恵器生産ー経営主体と工人をめぐってー」『王朝の考古学』雄山閣
- 服部敬史 1995 b 「東国における古墳時代須恵器生産の特質」『東国土器研究』第 4 号 東国土器研究会
- 畑中英二 1995 「堅穴建物の問題」『日置前遺跡Ⅰ』滋賀県教育委員会
- 山口耕一 1995 「専用型骨蔵器と転用型骨蔵器」『東日本における奈良・平安時代の墓制ー墓制をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会
- 香川慎一 1996 「焼土坑に関する再検証」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
- 木本元治 1996 「東北地方の複弁六葉蓮華文軒丸瓦」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
- 菱田哲郎 1996 『歴史発掘⑩ 須恵器の系譜』講談社
- 片桐孝浩 1997 「讃岐出土の東北系土器についてーとくに黒色土器についてー」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要 3』
- 北野博司 1997 「古代北陸の地域開発と出羽」『日本考古学協会 1997 年度秋田大会 蝦夷・律令国家・日本海』
- 高橋照彦 1997 「古代須恵器生産の予備的考察ー東西比較の前提としてー」『東国の須恵器ー関東地方における歴史時代須恵器の系譜ー』古代生産史研究会
- 巽淳一郎 1997 「飛鳥石神遺跡出土の東北系土器」『日本考古学協会 1997 年度秋田大会 蝦夷・律令国家・日本海』
- 津野 仁 1997 「須恵器技術・工人編成と系譜ー関東を中心としてー」『東国の須恵器ー関東地方における歴史時代須恵器の系譜ー』古代生産史研究会
- 藤居 朗 1997 「近江における古代寺院の出現とその背景」『古代寺院の出現とその背景 第 1 分冊』埋蔵文化財研究会
- 藤原 学 1999 「須恵器窯の構造と系譜ーその技術と源流」『須恵器窯の技術と系譜ー豊科、信濃、そして日本列島ー発表要旨集』窯跡研究会
- 熊谷公男 2000 「養老四年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」『国立歴史民俗博物館研究紀要』96
- 仙台市教育委員会 2000 『仙台市 王ノ壇遺跡』
- 長島榮一 2000 「仙台市郡山遺跡の平瓦をめぐって」『阿部正光君追悼集』阿部正光君追悼集刊行会
- 橋本博幸・鈴木啓 2002 「高松古墳群出土金銅製歩揺雲珠について」『福島考古』第 43 号
- 菅原祥夫 2004 「東北古墳時代終末期の在地社会再編」『原始・古代の日本の集落』同成社
- 鳥羽政之 2004 「東国における郡家形成の過程」『幸魂 増田逸朗氏追悼論文集』北武蔵古代文化研究会
- 飯村 均 2005 『シリーズ「遺跡を学ぶ」 律令国家の対蝦夷政策・相馬の製鉄遺跡群』新泉社
- 今泉隆雄 2005 「古代国家と郡山遺跡」『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編』仙台市教育委員会
- 能登谷宣康 2005 「金沢地区の古代鉄生産」『福島考古』第 46 号 福島県考古学会
- 安田 稔 2005 「陸奥南部の生産」『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』
- いわき市教育文化事業団 2006 『応時遺跡』
- (財) 福島県文化振興事業団 2006 「明神遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 46』
- 滋賀県教育委員会 2006 『国づくりを支えた焰ー古代国家と瀬田丘陵生産遺跡群ー』
- 望月精司 2006 「北陸地方における製鉄の成立と発展」『日本鉄鋼協会 第 152 回 秋季講演大会社会鉄鋼工学会』

- 渡辺 一 2006『古代東国の須恵器生産の研究』青木書店
- 栗東市教育委員会 2006「①下鈎東遺跡」『2004年度 年報』
- 雨森智美 2007「地方官衙関連遺跡の一樣相—近江国栗太郡での検討から—」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』真陽社
- 大道和人 2007「製鉄炉の形態からみた瀬田丘陵生産遺跡群の鉄生産」『考古学に学ぶⅢ』同志社大学考古学研究室
- (財) 福島県文化振興事業団 2007「山岸硝庫跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 48』
- 佐伯英樹 2007「旧栗太郡の7世紀と新開西古墳群」『歴史フォーラム 近江から見た古墳の終焉 記録集』
- 菅原祥夫 2007 a「福島県中通り地方南部～福島県会津地方」『平成 14～17年度 科学研究費補助金(基盤研究B) 研究成果報告書 古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 菅原祥夫 2007 b「東北の豪族居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 南相馬市教育委員会 2007『泉廃寺跡—古代陸奥国行方郡家の調査報告—』
- 菱田哲郎 2007『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 藤居 朗 2007「近江南部における古代寺院・官衙の整備と生産活動」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』真陽社
- (財) 栗東市文化体育振興事業団 2007『古代の役所とその周辺～岡遺跡・手原遺跡を中心に～』
- 小田和利 2008「古代集落遺跡の調査法Ⅰ—西日本—」『奈良文化財研究所研修資料』
- 佐川正敏 2008「討論」『シンポジウム報告 天武・持統朝の寺院造営—東日本—』帝塚山大学考古学研究所
- (財) 福島県文化振興事業団 2008「朴迫D遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 53』
- 南相馬市教育委員会 2008『泉廃寺跡—陸奥国行方郡家出土瓦の報告』
- 大橋泰夫 2009「国郡制と地方官衙の成立—国府成立を中心として—」『古代地方行政単位の成立と在地社会』国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 駒澤大学考古学研究室 2009『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ 菅ノ沢遺跡』
- 鈴木 啓 2009『ふくしまの古代通史』歴史春秋社
- 藤木 海 2009 a「泉廃寺跡と関連遺跡の8世紀における造瓦」『福島考古』第50号記念号 福島県考古学会
- 藤木 海 2009 b「陸奥国行方郡衙周辺寺院の陸奥国府系瓦について—郡衙周辺寺院と定額寺との関連をめぐる試論—」『国士舘考古学』第5号 国士舘大学考古学会
- 藤木 海 2009 c「考古学からみた古代行方郡の地域社会」『いわきヒューマンカレッジいわき学部 第2回講座』
- 菱田哲郎 2010「須恵器窯の構造と工人移動論」『古代窯業の基礎研究—須恵器窯の技術と系譜—』窯跡研究会編、真陽社
- 菅原祥夫 2010 a「居宅と火葬墓」『研究紀要 2009』福島県文化財センター白河館
- 菅原祥夫 2010 b「東北」『古代窯業の基礎研究—須恵器窯の技術と系譜—』窯跡研究会編 真陽社
- 日本考古学協会 2010『古代社会と地域間交流—寺院・官衙・瓦からみた関東と東北—』
- 栗東市教育委員会 2010『高野・岩畑遺跡』
- 出浦 崇 2011「伊勢崎市三軒屋遺跡—16次調査の成果—」『第1回研究大会 関東甲信越地域の国衙と郡衙』東国古代遺跡研究会